

# 「他者」という罫

—— こどもたちに語る沖縄学<sup>(1)</sup> ——

前 嵩 西 一 馬

真の情熱は結局決意と同じに、云わば分析の結論の上で初めて発情する。「分析の結論」は決してまだ情熱ではないが、情熱を産まないような分析の結論は、「結論」のない分析であり、ペダントリーや弁解に於て見られるような匍匐的リアリズムに過ぎないのだ。

——村山知義<sup>(2)</sup>

## はじめに

人類学的なアプローチにおいて、日常の身体や日頃の感情に注目することで「できごと」や「経験」に新たな光を当てるという手順が物を言うことがある。たとえば長い日本列島を人類学的な視点でどう捉えるか、といったような問いかけがそうだ。視覚という回路を礎にした想像力を効果的に用いる。北は北海道から南は沖縄まで、という表現がある。飛び石のように島が連なっている。その連なりが見えなくなるのが、南西諸島である。そして実は沖縄の中でも、久米島から宮古島は見えない。八重山宮古文化圏と呼ばれる所以がここにある。これが文化を感じる回路のひとつである。「文化の語り」における空間的な把握を促す最も簡易で効果的な問いかけのひとつがここにある。そして皮肉なことに、そのような問いを用いた途端、そこに住む人々の身体的な視野がそっく

り抜け落ちてしまうことがある。しかしそれぞれの土地に住む人々の視線だけでは、この「文化の語り」自体がそもそも成立しないというジレンマが生じてしまう。

「文化の語り」は空間のみならず、時間にも当然その効果の範囲を広げることができる。やや性急ではあるが、ここでは、ナショナル・メモリーとは異なる形で集団の記憶をどう問題化できるか、という問いをまずは（上記のジレンマ込みで）共有しておこう。母語やナショナルな同一性の物語から疎外された者たちの経験や表象は、従来のあるいは既存の分節化ではチューニングできない声で語られる。その調節（チューニング）不能な状況に内在する不安は、たとえば民族誌においてフォントが小さくなったり斜体字になったりすることで他者として登録済みの「ネイティブの声」から発せられることはない。それは、様々な場面において「文化の語り」として呼びうるテキストの精読を通してかろうじて浮かび上がる。

「文化の語り」において最も重要な要素は、「感情」である<sup>(3)</sup>。たとえば、グスクと呼ばれる沖縄の城跡群は世界遺産に登録されている。しかし、地元には、それらの石が戦後米軍に全部取られていたという話が密かに伝わっている。玉城のお城だけ石が残っている。世界遺産のオフィシャル・ストーリーにはまず出てこない。このように（フィールドワークで出くわす）数多くの語られない「文化の語り」というものを通して、人々のグスクに纏わる微細な「感情」に触れることができる。我々が知っている文化や歴史は、どのような形で創られてきたのか。歴史や文化を学ぶとはそもそもどういうことか、また、知らないことを知るといえるのはどういうことか、こういった普段はあまり考えない原理的な問いを、沖縄の近さと遠さ<sup>(4)</sup>を通して考えてみたい。

歴史の表象は、夜空の星のようなもの。そこにすでにはない星が放つ光が手に取るようにリアルに見える。もうないのにある。その星について人々は語り継いできた。歴史の夜は語りの朝を迎え、そしてまたそれを繰り返す。様々な「文化の語り」が充満している現代社会において、そこに住む人々の身体的な視野を含む固有の語り「共同体の記憶」としてどのように構成されてくるか

という視点から、本稿では2つのテキストを見ながら、我々自身がすでに持っている「感情」を、生きた「テキスト」として使ってみたいと思う。1つ目は、沖縄の批評家と歴史家の間でかわされた沖縄の「今」をめぐる対照的な視線が刻まれた書籍であり、2つ目は、こども向けの学習雑誌に掲載された記事をめぐる執筆者としての経験である。いずれも、次世代に向けての言説をどう形成していくかという問題意識を共有しており、両者ともに「カタリツグ」行為に必然的に内在する（二重の）身体性とそれに付着する感情について考える時間を共有しうるテキストだと言えよう。

ちなみにカタリツグという言葉には、pass on もしくは hand down という英語表現が対応する。ここでは talk, speak, tell といった発話行為自体は口にされず、そのかわりに、ある「時間」の幅——たとえ我々が生きている「今」や「この世界」——を超え出ようとする身体性が手を伸ばす。その「手」が2つの身体——何かを渡そうとする者と渡される者——を撫でるとき、切実なコミュニケーションは、世界中に遍在する「文化の語り」に姿を変える。本稿ではそのような語りを担う者として、ときおり「私」という一人称が登場する。さて、その文化の物語にとって「私」から手渡される固有の「内容」や行為はどのような意味を持つのか。まずは最初のテキストを紐解いてみよう。

## 1. 「沖縄問題」を描く

ここに、沖縄の団塊世代を代表する論客二人がものした書籍がある<sup>(5)</sup>。沖縄イニシアティブ論争<sup>(6)</sup>で沖縄内外に大きな議論を呼んだ歴史家高良倉吉氏と、沖縄のオルタナティブを常に模索している左派的知識人仲里効氏が、沖縄戦、本土復帰、基地問題など30の時事的、歴史的トピックを論じ合った。いわゆる沖縄問題と称される問題群に対する二人の立ち位置の違いとともに、彼らの沖縄に対する思いが率直に綴られている好著である。戦略的に沖縄が主体を立ち上げていくためには日米安保路線に乗ったうえで知識人は言説を戦略的に形成すべきであり、それが彼らの責任でもあるという高良も、そうではない、

あくまでも、国民国家や資本主義といった今あるシステムを疑うというのが知識や思想を生業とする人々の責任であるという立場の仲里も、実は「アジア」をあるひとつの濫喩として、沖縄あるいは沖縄と日本を語っている。高良のほうが「アジア」という言葉をより多く用いているが（そのぶんだけ高良の文章のほうが実存感を持つ箇所もある）、いずれにせよ、両者ともその意味するところが今ひとつつかめないというもどかしさが残る。（「アジア」の記号性については後述する。）

この書籍の腰帯に目をやると、そこには「沖縄の苦悩が聞こえる」という文言がある。そこで前提とされているのは何か。この帯の付いた書籍を、書店で商品として手に取る者にとっては、苦悩する「沖縄」という主体がまずある。そしてそれを聞く者という主体が想定されている。もっとも、この「聞く者」はまだ主体化されていない可能性もある。なぜから、この文言からだけでは、「聴く」という意思を持った主体がいるのかどうかわからないからだ。聞こえる、という言葉は、聴く「listen to」意思をもたないにもかかわらずどこからか聞こえてくるものにたまたま身を置くという「hear」である可能性があるからだ。まるで、店先のラジオから沖縄出身のユニットが奏でるポップスがたまたま聞こえてくるように。その両者が主体としてコミュニケーションを発動できるのは、つまり、「沖縄の苦悩」を聴き取る主体が日本国内に点在する書店で一定数立ち上げられるときとは、残念ながら、日本が後戻りできない事態に陥ったときなのかもしれない。すなわちそれは、国内各地に自衛隊米軍を問わず軍事基地が増強配備され、本土が「沖縄化」される状況になってようやく日本に住む人々が「沖縄の苦悩」という徴候に事後的に気付くという、危機的な（critical）「とき」であるだろう。こうしてかつての政治的主体は日本に回帰する。はからずもこの書籍の帯は、「沖縄問題」とは何か、という問いへのひとつの決定的に重要な（critical）状況証拠的かつ行為遂行的な回答になっている。

### 1-1. 「沖縄を定義する」という行為

本書において、沖縄に関わる言説として決定的に意味を持つ「対立構図」が提示されている箇所は幾つもあるが、本稿では巻末に収められた対談を取り上げることにしよう。「沖縄の歴史、国家、自立」と題されたダイアローグは、読売新聞西部版の紙面において、先述したように30のトピックを高良と仲里が互いに論じるという1年3ヶ月に渡る連載のあと、2007年に行われた。その冒頭でまず、両者の沖縄の定義における差異について触れられている。

仲里 高良さんは、沖縄を日本というフレームの中に位置づけている。私は、そのフレームに必ずしも内蔵できないエッセンスがあり、そこに沖縄の可能性を見いだすべきだと考えている。もう一つ、文体に違いがあった。高良さんの場合は非情に比喩的に言えば、パースペクティブ（透視的）な視線によるものだ。彼が鳥の目だったら、私は虫の目かも知れない。

仲里は自らの沖縄に対する眼差しを虫の目と名付け、高良のそれをより俯瞰的な鳥の目と呼ぶ<sup>(7)</sup>。ここでは、そのメタファーに沿って、両者の沖縄を定義する行為の差異について考察していきたい。

「自分の体験してきたことをどう言語化していくか」という問題意識の中から特異な文体を発明してきた仲里にとって、高良の言葉は「治者の論理」に汚染されているように聞こえる。米兵による少女暴行事件に対する抗議が沸騰する中、当時の沖縄県知事だった太田昌秀（二期目、1994年から1998年）が提示した沖縄の定義へのアンチテーゼとして「沖縄の定義」を確立させていった歴史家高良をヘーゲル的だと呼ぶ一方で、仲里は、自らの眼差しには「全体を鳥瞰する歴史が見落とす人間や事象へのまなざしを向け、歴史を逆なでにする」、すなわち「時代の裂け目を丁寧に見ていく視線がある」ベンヤミン的なものが内包されていると分析する。高良はその布置に対して特に否定せず、復帰後の沖縄のための「国史」作成として、自らの沖縄の定義づけの動機を語る。その

中で、彼は「アジアに出かけて考えたこと」や「宮古、八重山、奄美の世界のこと」を取り入れた事実を強調する。ここに、主体的な歴史（あるいは文化）の語りにおいて、地理的な移動の経験をどのように還元しうるかという問題が引き出せるだろう。

高良は実際パフォーマティブでアクティブな歴史家として、基地の町でロックフェスティバルを開催し、軽妙な語り口が評判を博すラジオ番組を持ち、アジア諸国をはじめ様々な土地に足を運ぶことを通して、自らの土地を主体的に俯瞰的に把握する視座を固めてきた。そこには、連載中高良の発言のそこかしこに感じられた、歴史家の自負がある。すなわち、自ら獲得したこのような視座こそが沖縄の生活を生きる市井の人が共感できる形での沖縄の主体性をもたらす（つまり民衆の力となる歴史の語りがある）のだと。しかしそこで「アジア」という言葉は、日本という国民国家との具体的な交渉や衝突の蓄積の場として捉えられることはなく、むしろ、自らの主体を（あるいはやや意地悪に踏み込んで言えば、その主体にとって都合のよい民衆というイメージをも）確立する道具立てのひとつとして、そして、自分が所属する社会の現在＝歴史を構築する素材のひとつとして疎外的な記号として用いられている<sup>(8)</sup>。

高良は沖縄イニシアティブという提言が、「沖縄の新しい政治的パフォーマンスの始まりだった」と位置づける。この「パフォーマンス」という言葉に注目してみよう。そこには行為の効果を期待する、もしくは少なくとも前提とする主体性の確認がある。その主体性があることによって、実は仲里の主体性もまた、パフォーマティブに確認されるという皮肉な構図がじわじわと浮かび上がってくる。仲里（の言説あるいは立ち位置）は、高良のように能動的に一つまり現行のシステムに対して自らの機能を高らかに掲げ積極的にその役割を担うことでシステム内の主体性と生産性を謳う一動かない。動かないことによってある種のシアトリカリティ（演劇性）を持ってしまう<sup>(9)</sup>。

高良の沖縄を定義するという行為の目的地は（仲里がこの対談中で示したように、ヘーゲル的な）「現在」である。しかし仲里の目的地は違う。彼の言説はどこへも動かないのだ。動かないことで何かを立ち上げようとしている、と言っ

でもいい。この動かないという動きは、高良の「鳥の目」がタイムを競うゲームを肯定する（そしてそのゲームに積極的に参入していく行為に繋がる）のに対して、仲里の「虫の目」は、タイムを競うことそのものを問う姿勢に見えてくるのだ。この対立は、やや性急に過ぎるかもしれないが、政治的そして経済的に展開されているグローバル・ゲームに「乗り」、その枠組みのなかで精一杯機能することで当たられた「分け前」に与るという行為＝姿勢に対して、システムからの要求に素直に従うのではなくまず「立ち止まり」その枠組みの妥当性自体を問うという行為に重ねることができるだろう<sup>(10)</sup>。沖縄の近代史の中で、そして現在においても暴力的に措定されてきた所与のシステムの中において、「イニシアティブ」をあえて取るという立場に対して、その暴力性自体をまずは問い直すことで異なるオルタナティブなシステムのあり方を考える、つまり「イニシアティブ対オルタナティブ」というこの二項対立の構図こそが、沖縄を定義する行為の批評的類型だと言える。

本対談の終盤戦において、この対立構図が言語というトピックを介してより鮮明に浮かび上がる箇所がある。

高良（前略）私たちと子どもの世代に言葉のギャップがあるのは、沖縄だけの現象ではない。地域の伝統文化が受け継がれなくなったという日本全国どこにでもある現象だ。方言を語るときには、そのことを考慮に入れなければ一方的な議論になる。

仲里　そういう風に一般化してしまえば元も子もない。沖縄という場にこだわって植民地主義の問題や国家のあり方を考えるとき、沖縄の言語体験は日本中のどこにでもある問題だということではすまない。

高良　それでは、言語を奪われた人間、植民地的身体性をすり込まれた人間に対して、どうすれば良いと説明するのか。今も続いている植民地的状況を打倒するように説くのか。

仲里 そうではない。近代というコードとは別の回路から立ち上がる主体があってもいいと言っているんだ。主体の立ち上げ方を国民や国語というコードの下でならしていく文脈自体がおかしい。

高良 思想性を持った知識人にしか分からないような議論ではダメだ。これからどうするんだということを庶民に分かるように言わなければ。植民地的身体性すり込まれているために文化が断絶していると言うのだろうが、一番の問題は、伝統文化が寸断された状況を見据えながら、今を生きる人間がそれをどう再構築するかということだ。

仲里 今には今の位相があり、三十年前や五十年前には「植民地的身体性」の現れ方が違う。言語体系は国民国家体系と密接に結びついているということだ。沖縄の言語体験の中に国家が埋め込まれていることにもっと自覚的であるべきだと言っているのだ。近代化によって伝統が失われた他の四十六都道府県とは違うんだ。

高良 仲里さんの主張を聞くべき人間は誰なの？ あなた自身なのか？ 誰のために議論しているのだろうか。

上記の議論の前にポストコロニアルという概念をめぐる両者のやり取りがあり、その具体的な事例として沖縄の言語体験が取り上げられる流れとなっている。ひとつの国民国家内における使用言語の有用性と多様性についての価値観の違いがお互いに確認された後に、この、言葉を用いて言葉を扱うというメタレベルな議論において、両者はイニシアティブ対オルタナティブという構図の典型的な「差異」を次のように見いだす。高良にとって、言語とはあくまでも生活主体の自己実現の道具に過ぎず、また社会全体にとっても時代背景や環境によって従属的に変化して構わないものである。その一方で仲里にとっての言語とは、主体形成そのものに重要な役割を果たすもので、言語の有り様が、時



代の文脈や条件に個々人や社会全体がどのように関わり合えるかという可能性の問題に直結する。そしてこの議論は、言葉を用いて言葉を扱うというメタレベルな議論であるが故に、仲里にとって現状を変革しうる身近な可能性という最重要課題が、高良の目には知識人のみを相手にする類の高尚な空理空論と映ってしまう。但しここで高良の弁を反主知主義と切って捨てるのは、両者に共通する「沖縄を定義する」姿勢そのものに内在する重要な資質を見逃すことに繋がる。

### 1-2. ねじれた世界における「経世済民」のあり方

両者の「沖縄を定義する」という行為には、それぞれの柳田国男の言うところのいわゆる「経世済民」の思想が宿っていることがわかるだろう。鳥の目も持つとされる者が、庶民の代弁者を買って出る一方で、虫の目を持つ者が、庶民に理解されない高尚な説を提示していると自他共に認める「ねじれ」に注目したい。（対談において高良は仲里が述べたこのメタファーに対して特に反論せずむしろその比喩に乗っかり議論を展開しているので、両者ともこの比喩的姿勢を引き受けているものと見なす。）通常メタファーであれば、鳥の目は目線が高く、地を這う虫の目は庶民の視点とされるはずだ。なぜここにねじれがあるのか。それは端的に言って、その鳥と虫が棲まう世界がねじれているからに他ならない<sup>(11)</sup>。文化と政治が織りなす分厚い壁を一点突破する一撃として、私は（民族誌的）叙述という方法を採用しているのだが、そこで形成される特異な「視点」こそが、そのねじれをかりうじて可視化しうる私なりの経世済民のコトバに繋がる。

現実のなかで沖縄を定義する所作において、異化が進んでいるように見えて実際は同化が進んでいると、とある沖縄文学研究者は喝破している。そのような現実のなかに確固たる制度として存在する学問領域におけるある台詞について考察したい。それは「沖縄研究化しようとする沖縄学がある」という、否定的な文脈で用いられる台詞である。ここで私がどうしても共有したい問いは、この「沖縄」というところに、「日本」を代わりに入れてみることができるだろうか、という問いである。おそらくその答えは否である。日本研究というも

のはありだ。日本人以外のあるいは日本の外での日本研究は制度的に可能である。ではなぜ、沖縄研究というコトバだけ否定的に語られたのか。そこに、「沖縄学」という主体の揺れが潜む。日本語という環境のみを条件にした場合、沖縄研究は、沖縄の主体性が剥がれ、あたかも沖縄の自律性を伴った苦悩を消去しているかのような印象を与える。しかし、日本語圏外では、むしろ、そのような日本語の磁場が持つナショナルなものへの批判的視座がより容易に獲得できる。(たとえば人種をめぐる人類学的議論の場において、日本のアカデミズムにおいては何々ロイドというコトバ使いへの批判的視座は、アメリカの社会的背景の説明込みで提示される。)

先の台詞に見られる「沖縄研究」というコトバが指し示す事態への違和感もまた、沖縄学の主体性を救い出すために(そしてそのような行為を学問という制度のなかでなしうる研究者は殆どいない。なぜなら、まず沖縄を扱う研究機関をはじめとする制度的環境が乏しいからであり、沖縄人ではなく日本人で沖縄を研究している人が少ないからであり、そしてそのなかでもこのような批判的視点を持ちうる人はとても少ないからである。)差し出されたものなのであるが、その行為/好意を「沖縄人」という視点からさらに見つめ返せば、その姿が沖縄人と日本人の非対称性を前提とした温情主義的姿勢と容易に重なる危険性が見て取れるのである。おそらく今ここで述べている事柄は、ほぼ全ての読み手へ(今はまだ)到達されないコトバとして発せられる。架空の対話者に向け、私の分厚い壁を一点突破するための記述はこのような形を取らざるをえない。

現時点において、文化生態学的視点から見れば、そしてそのフォーマットで記述することを民族誌的記述と呼ぶならば、ここで読者と共有すべき、そして考察の対象とすべきリアリティは、現在私が使用している言語、この日本語という自明の環境のなかで、沖縄人という主体がどのような形態で出現してくるかという「観察」によって、構成されうるだろう。ここでは、その沖縄人を「観察」という行為に(これこそがまさにかつて人類館事件当時の人類学という学問が持っていた眼差しでありその本質は今も続いている)倫理的正当性を与える学問的妥当性(academic validity)に与しないという私の立ち位置を明示する

べく（これは日本語＝日本人＝日本文化という三位一体の神話的磁場のなかで確認確定表象されにくいポジションなのであるが、そうであるがゆえに）、学問的枠組みで観察するのではなく、あらゆる方法で<sup>(12)</sup>メタレベルの視点を組み込んだ「現実」を念頭に置きつつ、叙述の展開を試みるほかない。

## 2. 「他者」としての沖縄を描く

かつて沖縄出身の研究者が、学術的な会場の踊り場で「沖縄の人間が沖縄を語らないという権利もあるのに」と絞り出すような声で呟いていた。沖縄人（サバルタン主義者）が沖縄を表象してもしなくてもいずれにせよ非難される。表象すれば、本質化していると言われ、しなければしないで不合理な現実を目の前に沈黙していると言われる。まともな文化研究のアリーナではこういうジレンマが当然発生する。それは、まさに、サバルタン主義者<sup>(13)</sup>としてのあり方だ。

そもそも「サバルタンは語るができるか？」とは、脱植民地研究の泰斗スピヴァクの問いだ。彼女は「語れないよ」と言ったのだ。それに対してその学問領域のひとつの到達点は、語るかどうか、いつどう語るかではなく、聞き届けられるかどうか、が問題なのだということだった<sup>(14)</sup>。つまり、我々がどう聴いているか、という問いに変換されたのだ。そして現状はそのさらに逆なのだ。実際に語るサバルタンの声があまりにも容易に聞き届けられ理解されること、それ自体が問題なのだ。サバルタンが捉えられている対話の弁証法では、彼を抑圧する側が常にすでに対話の言語を一方向的に確立させてしまっていて、彼を擁護する活動家や学者や批評家ですら、抑圧者の言葉で語らざるをえず、さらにはサバルタン自身の語りさえも、理解される意味世界のなかで、抑圧する側の覇権によって固められた文脈のなかで、朗々と聞こえてしまうのだ！

ではこの問いは、教室にどのように持ち込まれるのか。たとえば2016年沖縄島北部の闘争の地において機動隊が現地の人々を「土人」呼ばわりしたでき

ごとがあった。事件化したその発言を中心に、多くの言説が生産され、某ラジオ番組にゲストスピーカーとして出演した私もまた、言葉を紡いだ<sup>(15)</sup>。ネットウヨがすくい取れずかつ私の声の残滓（ノイズ）が届くよう心懸けた結果、「世界土人会議」なんていうものをやるのもいいですねといった脱構築的発言や、沖縄の人々が常にすでに土人という言葉が南洋諸島で使用していたというポストコロニアルな歴史を持ち出すことで、その塗り固められた意味世界をずらす試みを行った。その結果、私がMCとの静かな綱引きをしていたと表現していたリスナーもいれば、「偏った」レッテル張りから逃れた聴き手もいたことが確認できた<sup>(16)</sup>。当時私が担当する沖縄学関連の講義に参加していた学生諸君にも呼びかけ、聴き手の判断を宙づりにする技術（一時停止）が、やりとりのなかのどこに隠されているか、そのような問いを共有する課題を提出した。その土地の歴史や文化のみならず住む人々の身体性や視野からも学ぶために必要とされる、「他者」としてその土地を描く行為が自明なこととしてルーティン化しないためには、どのような仕掛けが必要なのだろうか。

## 2-1. 「沖縄の歴史を描く」という行為

次は2つ目のテキストについて見ていこう。かつてこどもたちに向けて沖縄を語るという貴重な仕事を担当したことがある。朝日新聞社が出版している雑誌『アエラ』のこども向け（小学校高学年を主な読者として想定）版で『ジュニアエラ』という雑誌の編集部から連絡があり、基地問題についてこども向けに特集記事<sup>(17)</sup>を作成するのを手伝って欲しいと要請された。当時本土復帰40年の節目ということもあり、思い切って引き受けては見たものの、実際に編集者と記事の構成や内容について話を進めていくうちに、その根本的な困難さに手を焼くことになった。

それは一言で言うならば、研究者や大人が自明としている枠組みを外した場合に、どこまで沖縄を語るができるのかということだった。資本主義のメカニズムや帝国主義という言葉を用いずに、如何に沖縄の「特異な」状況を語るができるのか。日本語、日本人、日本国という三位一体の神話（酒井直

樹)の環境の中で、形成される「沖縄」が常に捉え損ねるものについて考えるなか、今使ったこの「特異」という言葉そのものが、何を私は語りたいのかという自らの欲望を照らし返す好機となった。そして、沖縄を語るアリーナにおける重要なポイントとは、「他者」としての沖縄をこどもたちにどう語るかということであった。

本稿では、こどもに語るフォーマットを通して、編集サイドと最後まで討議した領域について具体的に見ていきたい。討議したポイントはたとえば以下の内容だった。

1. 世論調査のデータ選択について。よりいい具体的な代替案。2010年5月11日と15日の沖縄タイムスの「県内移設」を巡る沖縄世論の変化についての記事（4月に世論調査実施）の妥当性。また、2002年のこの調査の元データを当たって質問の意図などを再確認したいという歴史学者の意見を参考にした。
2. 「県外移設に反対という沖縄の声の多さ」の理由について誌面上でどう機能するか。やや固定化された言い方になるが、いわゆる「革新系」の人々の頭には、「本土に移設したって結局日米安保再強化にしかないので、県外移設はやはり反対」という「安保反対」堅持という考え方も多くある。つまりはイデオロギー的にはこのように説明できる。また、たとえば、共産党であれば、党利党是として本土の黨員も沖縄の黨員も、「国内移設反対、国外移設賛成」で統一しているので、一定数そのような声がある、という政治学的な分析が可能だ。しかしそれでは、もうひとつの沖縄の歴史的文脈、生活という体温が浮かび上がってこない。それが次の3つめの点になる。
3. 誌面では、「95年以前は」と書かれているが、「90年代後半までは」といったようなややおおまかな表現に替えるべきだという私のコメントについて。理由は、県レベルの意向がどうであったかということを示す記事が見つかったことと、95年の少女暴行事件をまずい形で象徴化させる恐れがあると

思ったからである。ちなみに、県庁の公式見解は、たとえば「県外移設も選択肢1998年3月31日」という琉球新報の記事で確認できる<sup>(18)</sup>。

大田知事（当時）について、「県外移設について、これまで大田知事は「自らの痛みをよそに移すことはしたくないというのが県民の大方の意向」と再三強調し、基地の県外移設を国に求めることに否定的な見解を繰り返してきたとある。つまり、少なくとも県レベルでは、98年までは県外移設の意向はなかったと考えられる。この声、現在の沖縄の人々が発しているこの声こそが、基地問題のイメージに潜む、ノイズのような異物なのかもしれない。常に見つめられる側だった者が、こどもが、見つめ返している。その見つめ返される眼差しを、どう受け止めることができるのか。そして、見つめ返しているのは、本当に、こどもなのか。ひょっとして、見つめている者が常にすでに見つめられている者だったとしたら。

4. 基地があって「経済的に助かる」という言葉だと、この「助かる」という言葉が含む多義性をうまく伝えられないと悩んだ。基地の近くに住み仕方なく基地に経済的に依存せざるを得ない人の声と、基地から離れたところに住み（那覇や石垣島など）基地があったほうがまあ県の財政が多少は潤うから「助かる」という声が、ここには含まれている。この「助かる」という言葉を別の言葉に変えることについて検討する。マイノリティの声が、このように経済的な指標を含む言葉使いでしか翻訳できないという問題をどう考えるか、ということは、とても重要なポイントである。それは沖縄に限った話ではない。たとえば3. 11直後、「美味しんぼ」という漫画をめぐっていわゆる「福島表象の問題」が取りざたされたことがあった<sup>(19)</sup>。東京を中心とするメディアで語られずしかし福島の人々のあいだで真っ先に語られた事柄のひとつは、補償問題に関する案件だった。政府筋の人々は福島よりの発言をして安心させているように見えて、むしろその逆に補償を打ち切るステージへ進んでいるのではないかという大きな不安を福島の人々に与えていた。



5. 沖縄は日本にとって歴史の「他者」だから助けるべきなのか、国民という「同胞」だから助けるべきなのか。教育と研究の齟齬が見つかる領域で、私達はどのようなまなざしを獲得できるのか。

ここでは、最後まで編集部と揉め共に悩んだ5の問いを取り上げてみたい。この問いについて簡潔に言い換えるならば、米軍基地が不平等に負担されている沖縄の状況を子どもたちに平易な言葉で語る際に、沖縄を日本の他者として扱うのか、それとも同胞として扱うのか、ということになる。どのような経緯で沖縄が米軍基地問題を抱えるようになったか、その歴史を紐解く際に、どうしても、沖縄の歴史と日本の歴史が異なるということに触れざるを得ない。友軍にスパイ扱いされて殺された沖縄の戦場の記憶や方言札といったざらざらした歴史の手触りを体感するプロセスが必要となる。

もしそのとき、沖縄が日本と異なるということを紙面で強調すると、それを讀んだ子どもたちが、「沖縄は日本じゃないんだ、だったら助ける必要なんかないじゃん」と思ってしまい基地問題に関心を持たなくなる危険性がある。かといって、沖縄の特異性を骨抜きにして沖縄問題を語ることは不可能だ。あくまでも学術的な正確さにこだわり紙面を作って、次の世代の日本人が自分たちの問題として基地問題を学習する機会を逃すのか、沖縄の他者性についてはある程度妥協した紹介を心がけ、日本の問題として基地問題をしっかり理解してもらうか。

結局私は後者の語りを選択した。47人のクラスのほかの子たちにいじめられている沖縄君というキャラを設定し、いじめに無関心なことがいかに問題なのかを訴えるという見立てを構築した。「沖縄目線の日本史」という絶妙なフレーズを考案した編集者に感謝しつつも、研究者目線からは国民意識を強化する反動的なテキストを作成してしまったという、後悔の念も抱いたということもここで正直に告白しておく。

なぜなら、本来倫理とは共同体の成員ではない者にこそ向けられるものだからだ。しかし、教育的効果という名の「戦略」を優先させたイメージをこのと



きは選んだ。この苦渋の選択を、調和のとれた誰もが納得安心するイメージではなく、個としての非常に微細な、一般化が難しい、めんどうな苦悩を、ノイズとして、うまいこときれいにまとめることのできない喉に引っかかった魚の小骨のようなものとして、あらためてここに差し挟んでおきたい<sup>(20)</sup>。

## 2-2. 「民族主義」や「独立」が示す「フェアプレイ」

ここで「同胞ではない」という文言に、「独立」という政治的な言葉が呼び込まれる予感を持つ者もいるだろう。あるいは「民族主義」という言葉も然り。前者の「独立」に対しては、基地問題から見れば沖縄に依存しているのはむしろ日本本土の側であり、沖縄は独立するべきだ、ではなく、日本は自立するべきだ、となるのが筋だろう。この点については後述するとして、まず後者の「民族主義」について、ファノン<sup>(21)</sup>は3つの民族主義について述べている。まず、かつての植民者であり主権を越えた統治を行う者が主張する民族主義。次にその「独立を与える」とする統治権力に対応し交渉する側の、つまりエリートや民族主義政党が主張する民族主義。実はこれら1つ目と2つ目の民族主義は、対立しているように見えるが、同じ「交渉」という政治的空間を共有しようとしている点で、同じ土台に立っていると言うことがわかる。そして最後が、両者が構成するところの政治的空間を脅かす潜在力を持った、第三の民族主義である。

この三つ目の民族主義を、ファノンはルンペンプロレタリアートの民族主義と呼んだ。たとえば富山一郎は、この3つめの民族主義に着目し、そこに根源的敵対性（radical antagonism）の確保があるということの重要性を強く指摘している。根源的敵対性とは、自明とされている政治的空間を根底から覆すような否定性のことであり、対立する力を定義する構造自体に対する否定性とは、対立する力を力として成立せしめている問われることのない土台自体を融解させ、その土台の上にある既存の対立が別物になるような契機を狙い撃ちしている力のことだ。その力を消費者のお茶の間にたとえていうならば、こういうことになるかもしれない。コカコーラとペプシの比較広告が大量に垂れ流され、

われわれ消費者は、どちらの広告がより過激でライバル社の商品よりも勝っているか、その戦いを楽しみ、また享乐的にいずれかを選択し消費する。しかし、たとえばインドに住まう貧しい農家の人々がコーラを農薬代わりに密かに使用しているという衝撃的なニュースを見ることで、問われることなかったそのペプシとコカコーラという二項対立を支える構造が解けてしまう危険が生じる。(主に米国で使用されている) 比較広告は資本主義の典型的な文法だ。コカコーラとペプシの二項対立を共犯関係とみることで、そこに透明無色な「政治」の発動を発見する。そこに真の敵対性はない。交換価値はそのままに、使用価値をラディカルに変更することで(つまりコーラの成分を有機的に環境適応させることで!)、市場世界そのものにダメージを与えることになる。このアクロバティックな転覆可能性が、敵対性という概念の可能性なのである。そして、ポストコロニアルとは、学術的なターミノロジーを散りばめた悟性的な解説ではなく、その否定性が動かす現実の展開、現勢化の力、そしてその現勢化を阻止しようとする囲い込みという別の現勢化、これらを取りまく暴力的なものを指し示す物言いなのだ。そのような「暴力」の在処をこどもに語ることの意味は何なのだろうか。その問いへの暫定的な答えが「フェアプレイ」を学ぶこととなる<sup>(22)</sup>。

ただし留保すべき点は、この系譜は、一方で、それではまるで、African American Studies を含む米国の Ethnic Studies のフォーマットのなかに、沖縄学もしくは沖縄研究を安易に落とし込むというプログラムにそのまま重なってしまう危険性がある。ここで述べることができることは、全ての研究者がそれぞれの identity politics を発動させつつ、隣接領域との緊張関係のなかに(たとえば米国の Area Studies (地域研究) と日本の歴史学の布置 = 共犯関係のなかに「齟齬」を発見するとか) 学問体系の転覆可能性を常に含みながら、研究・教育行為を重ねるしかない、ということだ。ここで述べられていることは、沖縄の「学知」をめぐる制度的あるいは共同体的場面の一コマとして、よく見られる光景についての人類学的知識の援用だ。そこには沖縄からの物言い(植民地主義的抵抗言説)に対して、ヤマトの良心的な知識人や政治家たちが取る行動を、「全

体の一部ではない部分」を「全体の一部」として抑圧する行為として見るというやっかいな作業も含まれる。

さて、フェアプレイとは、先に述べた、否定性の概念の一側面が、スポーツという文脈で具現化したものとして見ることができる。「一側面」というのは、つまり、フェアプレイという行為は、敵と味方の区別を無効にするものの、ルールやゲーム自体を、つまりフェアプレイが成立する条件を瓦解させる暴力までは持つことがないからである。そして、根源的敵対性の彼岸にあると思われる友愛や歓待の思想と手を取る所作になりうるからである。フェアプレイとは、現実にはありえないが可能であるべきだとする（法そのものが従うべき）規範つまりすべての行為の格律が、たった一人の行為によって示されるとき出現する<sup>(23)</sup>。

私にとって続けるべき作業、つまりプレイは、様々な場所でこのストーリーを語るということだ。そして、私にとって事後的に「フェアプレイ」と認められる行為は、おそらくこのストーリーを我々が共有する際に抱える困難や不安を、こどもや若者達に語るために語った内容と、そうなった経緯という新たな語りとともに、大人達にも伝える中に現れるだろうと想像する。もちろん、いま読者と共有しているこの場もまた、そのひとつになっている。

さらに先程保留しておいた「沖縄は独立するべきだ、ではなく、日本は自立するべきだ」という点についてみていこう。この文脈では、日本を沖縄に甘えている「こども」に見立てている。ここに人類学者グレゴリー・ベイトソンの「ごっこ」という「遊びと空想の理論」（精神の生態学）が補助線として機能してくる可能性もある。こどもは「ごっこ」遊びをするなかで、本格的な殺し合いに至らない形で共同作業として遊びというメタレベルのコミュニケーションを反復して成長していく。対立的な状況から実存協同に至るまでのプロセスが、こどもを大人にするのであれば、沖縄の否定性が、ややもすると、日本が立派な成熟した近代国家という「おとな」へ成長することに一役買うことになる。さて、これは果たして、否定性の生産的使用なのか、飼い慣らされた学問のなれの果てなのか、もしくは、新たな沖縄研究の嚆矢となるのか。基地応分負担

を求める声が沖縄からより一層の強度を持って聞こえてくる今、魯迅の響み（革命の徹底性）にならうなら、はたして「フェアプレイはまだ早い」のか<sup>(24)</sup>。

## おわりに

朝になると平地や山に等しく陽光が差す様に、社会生活のリズムはシステムによって差配されている。具体的で身近な生活空間は、それを密かに構成する国民国家や資本主義といった抽象的なものと切っても切れない関係にある。見えずらいその癒着を、学問の触手は「観察」や「想像」のレンズを通してつぶさになぞることができる。

しかし鎮魂の、怒号の、チルダイの、カリィの、その全てを探り当てられるわけではない。なぜなら触手そのものは「触られる」気持ちを理解する器官ではないからだ。たとえば祝日とは国土を再確定する特異な「時間」の反復であり、旅行とは日常の「普通」を正当化する「空間」の移動である。慰霊の日や沖縄観光は、こうして私達の「沖縄」を再生産し続ける。しかしいつの「沖縄」として、昨日の「沖縄」でも明日の「沖縄」でもない。そこに全ての可能性はある。

夜になると沖縄の空には東京という星が、東京の空には沖縄という星が見える。首都圏の若者たちが未来の夜空に見つける沖縄星を描くような講義を、首都圏のキャンパスで心がけてきた。微かな光源を探すためにこしらえた暗闇に、啓蒙の光を照らすことはない。届かぬものに触れることがあり得るようなリアルな天体を、当事者性の有無を強く意識する学生たちと共に仰ぐ。

そんな満天の教室でごくまれに、夜から朝への静寂につくられる何かを手にすることがある。ある年の慰霊の日直前の、基地の歴史と記憶を扱う講義の際、3年連続で講義に顔を出している学生から耳打ちされた。「先生こんなことを云っては失礼ですが、先日の沖縄での米兵による女性暴行死体遺棄事件の流れでこのテーマを扱っていると感じている学生たちにとって、このトピックは重くてしんどいと思います。万一来週から彼らが来なくなってしまっただけは本当に

もったいないと思うので、毎年この時期にこのテーマを扱っていると仰ったほうがいいのでは。」基地問題もまた自分自身への問いとして目の前の若者に考えて貰うよう工夫を凝らしてきた私にとって、その学生目線の「親身な」アドバイスは、頓珍漢だと一蹴できない一撃だ。控えめな彼が講義の最中私に直接話しかけてきたのは初めてだった。その純粋な「優しさ」が、逆に当事者の怒りに向き合おうとしないご都合主義の都会のゆるさに見えてしまう。しかし絶句によって生じたスペースに新たな考えが浮かぶ。その「ゆるさ」を想像力の可動領域に組み込めないだろうか。たとえばバスターミナル広場の喧噪を民主主義の揺籃に位置づけるが如く、運動家瀬長亀二郎の果たした「役割」や当山栄の「身振り」に沖縄の新たな民衆史を発露させる、そのどこへでも飛んでゆける想像力の翼という軽やかさこそが、いつか別の場所でリベラルで切実な卵を産み落としてくれるのだ<sup>(25)</sup>。

一方、同じ講義で新しい言葉を伝えてくれた学生もいる。沖縄の基地問題を扱う講義に初めて触れた彼は、「社会情熱」(Social Passion) とでも呼ぶべき何かが沖縄にあると感じたという。受難 (Passion) によってのみたどり着く知性があるとすれば、それこそは沖縄の「資源」となろう。たとえばそれは60年代ドル経済に組み込まれていったバブルな沖縄市場を、基地経済ではなく世界金融経済の枠組みで捉える冷静な視点に繋がるだろう。植民地下で独立運動の気運を醸造させていった世界文学のテキスト群を傍らに呼び寄せる感性に重なるだろう<sup>(26)</sup>。それは想像力の翼とは異なる。島々に広がる無数の切り株は土深く情けの根を張り巡らせる。あらゆる環境を養分として吸収し、その地の根はやがて海を越え山を越え世界の隅々にこびり付く他者の根と出会う。ゆるやかで強かな繋がり。沖縄の歴史を覗く際にどうしても掛けてしまう「同化と異化」の眼鏡を一端外してみよう。自らがどう変わりたいのか。どこまでも続く地の根を裸眼で手繰り寄せる一心不乱な知的好奇心と持続が、初めて沖縄を知った都会の若者が放った「社会情熱」という耳慣れない言葉に血を通わせることになるだろう。

先述したように、批評家は沖縄に留まり続ける自らの眼差しを「虫の目」と

名付け、それと異なる目線—日本のなかの一地域として沖縄を捉える、より俯瞰的な視点—を持つ歴史家の文体を「鳥の目」と称した。私はここで、その「鳥に喰われる虫」というもう一つの比喩的位相を加えたい。虫を啄み糞を垂れる鳥は、別の場所で新たに生まれる命を運ぶ。つまりその虫は鳥を利用して時間と空間を移動する新たな虫（視点）となる。ここに「喰われる」という実存的な苦みを伴う認識の力と移動への希求があり、「喰われてやる」というまだ見ぬ地と主体の到来を待つ翼を持たぬ者たちの想像する智恵がある。右翼左翼が争えば飛び立てぬ鳥と、固有の王国にかしづく虫は、お互いの不自由さを較べ合うのではなく、互いに繋がり合うべきなのだ。

教室は砂漠にもなれば雨林にもなる。砂漠の天上に輝く星を数える若者たちは、あるべき社会という地図を持つ。雨林の枝葉も自由だ。無数の鳥が巣立ち色とりどりの実や虫を啄み梢を跨ぎ糞を落とす。小さな命がそこかしこに息吹く。ひるぎに寄せる波の調べや珊瑚の重ねる時間に愛想を尽かされぬよう無数の小さな「文化の語り」に耳を傾け、私達も豊かな時間を持つべきだ。そして待つべきだ。

こどもたちに語る沖縄を通して私が学びつつあること。それは、沖縄を語る時常につきまとう「他者」という言説（の畏）と付き合う鍵は、トリッキーなプレイ（認識論）でもチームワーク（運動論）でもファインプレイ（英雄待望論）でもなく、フェアプレイ（各自が担う倫理的態度）だということ。フェアプレイの精神を抱きつつ、待つのだ。

- (1) 本稿は日本平和学会における平和教育分科会（2018年6月24日、東京大学）にて発表した内容を大幅に加筆修正したものである。当日会場に居合わせた「おとな」たちから多くのものを受け取った。また本稿は、こどもたちのためにわかりやすく書かれたものではなく、次世代へ、未来への倫理的責任を考えるという文脈で読まれるべきものである。
- (2) MAVO というダダイズムなどの芸術思潮を日本に紹介したグループのリーダーで、戸坂潤らと交流のあった優れた言論人。若き山里永吉（沖縄で最初に洋式結婚した人物として、また沖縄独立派の理論的支柱の一人として知られ、琉球政府立博物館館長などを歴任）が日本美術学校在学中とともに活動していた。ちなみに山里の書い

た沖縄芝居の台本「那覇四街昔気質」で、「命どう宝」という言葉は初めて用いられたと2000年にクリントン元米国大統領が来沖した際に、大城立裕氏が紙面（琉球新報2000年7月23日）で開陳していたが、実は復帰10年目に社会的に定着した言葉だったということを、歴史家屋嘉比取氏は明らかにした（『沖縄戦 米軍占領史を学び直す 記憶をいかに継承するか』, 2009年, 世織書房, 196-210頁）。沖縄の反戦平和のキーワードとなったこの言葉は、尚泰王が言ったという史実ではなく、沖縄芝居のなかの台本でもなく、伊良波伊吉というシバイシー（芝居人）が舞台上で初めて言ったのではないかという証明不可能な解釈は、つまりある想像力が現実の政治の力の糧になっていた可能性があるという事実は、「真の情熱」をもたらす。

- (3) その「感情」は日常と知性で構成される。「日常」という言葉が示すものは本人にとってあまりにも普通で、それがあつたということすら気がつかない。特別なものなど何もないという特別さ。その「特別さ」を支える優しさと悲しさの両方に気付くとき、人は特別な知性を持ち、そして社会の仕組みを変えていく。
- (4) 「文化の遠近法」については、以下の拙稿を参照。「Teaching Culture 教室の窓から覗く沖縄」, 『沖縄学入門 空腹の作法』(勝方=稲福恵子共編著), 2010年, 昭和堂。
- (5) 仲里効・高良倉吉(読売新聞西部本社文化部編), 『「沖縄問題」とは何か』, 2007年, 弦書房。
- (6) 通常以下のようにメディアでは分節化されている一連の「議論」であり、その総括は未だなされていないが、沖縄では一つの「事件」として語られることが多い。「2000年に高良(倉吉)氏ら大学教授3人が公表した提言。米軍基地は歴史や基地被害、平和の理念といった点だけから論じられるべきではないと沖縄のタブーに踏み込み、日米安全保障における基地の存在意義を容認。問題は負担の過剰さであり、「存在することの是非を問う問題」ではないと、沖縄側の意識改革を求めた。沖縄の言論界からは「権力への奉仕者」「現状追認論者」と批判された。」(朝日新聞 2013年4月26日朝刊 オピニオン1より)
- (7) 後述するように、私はここで、虫の目にもう一つの比喩的な位相を加えておきたい。それは、鳥に喰われる虫というものだ。虫にとって鳥は手も足も出ない天敵に過ぎないかも知れない。しかしその虫を啄み別の場所で垂れる鳥の糞には、その虫の卵が宿る。次の虫は別の場所で新たに生まれる。それは時間と空間を移動する虫(視点)になり得る。
- (8) 本書において仲里の「アジア」もまたある種の記号として作用しているが、仲里自身は後に台湾や中国との関わりのなかで、交渉の蓄積の場としてアジアを具体的に位置づけることになる。
- (9) 「文化の語り」における演劇性については、以下の拙稿を参照。「文化を漕ぐ、言葉を焼べる 沖縄の近代性と共同性に関する民族誌的断章」, 『琉球・沖縄研究』第2号(早稲田大学琉球・沖縄研究所), 2008年, 113-145頁。本稿で扱う高良と仲里のやりとりは、この論考で扱われるハーリーという沖縄の伝統儀礼=レースのコマにたち現れる演劇性に重ねられることでより理解しやすくなるだろう。

- (10) そしてここでもまた、新たな虫のメタファーが召喚される。哲学者ジル・ドゥルーズがかつて用いたユクスキュルのあの「虫」である。この感性を記述することが、「分厚い記述」(thick description)になるのではなく、文化と政治が絡み合い成立するあの分厚い「壁」に対して一点突破を図る強度を持ちうる記述となる。
- (11) このねじれた世界における言語と主体の関係性について、かつて「リアリティ・ショウ」という枠組みで提示した。そこでは、日本語という環境に出現する沖縄人という生態学的視点を共有すべく、描写=記述をベタに行うのではなく、学問的妥当性を常に疑う批判的視点を持ちつつ行う。「The Okinawan Reality Show: 揺れる「沖縄人」、掠れる「沖縄口」」, 2011年, 人類学研究交流会第9回交流会, 文理融合ワークショップ「沖縄人の表象をめぐって」。
- (12) その方法のひとつが、先述したリアリティ・ショウという枠組である。そこでは「参加者」全員が、露悪趣味的世界のなかにもかろうじて映し出されるわずかな人間の主体性を発見するということと、マイノリティであるかマジョリティであるかを問わず共有する抑圧の存在をユーモアを通して確認すること、この2つが達成されることを目標とされた。そこにユーモアが訪れない場合は、当然最悪の結果を招くことになる。
- (13) サバルタンとは、経済における権利剥奪、政治における抑圧、言説における沈黙、文化における否定、などを指すシニフィアン。
- (14) 以下特に第4章「主体の創造的な危機」を参照。ハミッド・ダバシ（早尾貴紀ほか訳）、『ポスト・オリエンタリズム テロの時代における知と権力』, 作品社。
- (15) TBS ラジオ荻上チキ Session-22「文化人類学者・前嵩西一馬さんと考える沖縄と差別」, 2016年10月24日。
- (16) たとえば以下のような、リスナーによるツイッター上のやりとりが確認できる。  
 酋長仮免厨 @kazoooya 2016年10月24日 その他 返信先: @kazoooya さん  
 酋長仮免厨さんが酋長仮免厨をリツイートしました  
 ちと聴いてみたけど、前嵩西一馬さんは「偏ってる」とはちと違うね。  
<https://twitter.com/kazoooya/status/790553093725224960> …「差別, 差別」と言う言葉が続いているけど、昔は、沖縄県民は本土から差別があっただろうけど、沖縄本土住民は沖縄先島住民を「差別」していたのも事実なんじゃないの?  
 酋長仮免厨さんが追加  
<https://twitter.com/kazoooya/status/790553093725224960>  
 酋長仮免厨 @kazoooya 返信先: @kazoooya さん  
 まあ、だいぶ偏ってそうなメンバーの番組だね…(´・\_・´) (TBS ラジオ「荻上チキ・Session-22」): <http://www.tbsradio.jp/85558> 【スタジオゲスト】…
- (17) 「特集 沖縄復帰40年 アメリカ軍が日本にいるのはなぜ」『月刊ジュニアエラ』, 朝日新聞出版社, 14-23頁。
- (18) <http://ryukyushimpo.jp/news/storyid-92793-storytopic-86.html>
- (19) 『週刊ビックコミックスピリッツ』5月12・19日合併号(2014年4月28日, 小学館)



に掲載された漫画『美味しんぼ』において、主人公が福島第一原子力発電所を訪れたあと鼻血を出し、地元の行政関係者が「福島では同じ症状の人が大勢いる」と語る場面を皮切りに、その後「今の福島に住んではいけない」といった発言が作品内で紹介された。これに対して風評被害を助長しているという批判がネットを中心に巻き起こりメディアが事件として取り上げる一方で、その作品の内容に対して福島県や閣僚から批判が続出した。

- (20) ランドセルを背負わせるために転入させたのではないかという恐るべき想像力については、後述する「否定性」をめぐる問いと合わせて、稿を改めることとする。
- (21) フランツ・ファノン（鈴木道彦・浦野衣子訳）、『地に呪われたる者』、1996年、みすず書房。
- (22) この議論は人類学や哲学の内部でも「全体の一部ではない部分」をめぐる問いとしてすでに行われてきたが、本稿では割愛する。たとえば、人類学で双分制という概念がある。これはいわゆる二項対立とは異なり、その世界、制度そのものを否定する「政治」の可能性を持つとされる。（クロード・レヴィ＝ストロース『構造人類学』（みすず書房、1972年）、「第八章 双分組織は実在するか」、ピエール・クラストル『国家に抗する社会』、G. ドゥルーズとF. ガタリ『千のプラトー』（河出書房新社、1994年）「第十二章 一二二七年—遊牧論あるいは戦争機械」などを参照。なお「双分制」についての議論は富山一郎氏（同志社大学）から頂いた私信に多くを学んだ。
- (23) 芸術家岡崎乾二郎との対話から多くを学んだ。
- (24) 暴力＝否定性＝独立ではなく、あくまでも、フェアプレイ＝言説でいくというマニフェストではない。八百長がルールの外に飛び出るということであるように、フェアプレイもまたルールそのもの成立させる条件をあらためて問う行為だとすれば、言葉の最大の機能である否定性を支持するというごく当たり前の表明に過ぎない。そして否定性をめぐっては、とりいそぎ次の問いを提出しておく。

「国家は種の直接なる統制を、個の自由なる分立との対立の総合的統一において具体化し、かえって個を生かし容す（ゆるす）ことに由って種を豊富にし、活潑にして、調和和平を内にもたらすと共に、絶対否定の類における種相互の平和を外に向って立しなければならぬ。その対立的なる契機の故に、その総合は常に動的にして危きに臨むことを免れないが、しかも内外の調和和平を理念とし、危きに遊んで安きことをその本質とするのでなければならぬ。しからざる国家は歴史の審判に堪えない。（田辺元、「種の論理」論文集Ⅰ、社会存在の論理、『田辺元全集』第6巻、1963年。）

上記の田辺元のテキストに、否定性を經由して日本人性を獲得すべきという「普遍」的回路があるとすれば、沖縄の独立と基地応分負担論とが叫ばれる今の時代に、「沖縄人ではない」という言説における回路が持ちうる普遍的な意味は、その田辺のテキストを迂回してはじめて日本語の世界に翻訳されうるものではないか。なお、「沖縄人ではない」という言説をめぐる民族誌的考察は、以下の拙稿を参照。「沖縄で探す「鞘」の言葉 — 「高度必需品」としての蝶柄、笑い、生物群」、『思想』

第9号，岩波書店，2010年，96-113頁。

- (25) 以下を参照。森宣雄，『沖縄戦後民衆史 ガマから辺野古まで』，2016年，岩波書店。
- (26) カリブ海のフランス海外県出身の文学者エメ・セゼールの植民主義論を読み返していた時のこと，彼の父親フェルディナンは毎朝出勤前にこどもたちにユーゴーやヴォルテールを読み聞かせていたと書いてあることに気がついた。以前読んだときにはまったくひっかかってこなかった箇所だった。もちろんフェルディナンのこどもたちにとってそれは，宗主国の言葉の習得以上でも以下でもなく，しかしそれと同時に，豊かな世界の広がりにも身を置く人間的経験となっただろう。実はその当時，毎朝息子に数分本を読んで聴かせていたので，エメ・セゼールが過ごした朝にすこし驚き，考えさせられた。「一房の葡萄」が収められた本（有島武郎がこどもたちのために書いた唯一の童話集で生前出版した唯一の単行本）を読み聴かせながら，私自身沖縄の学習塾に通っていた頃，本土出身の国語担当講師に，沖縄のこどもたちは国語のテストではハンデがあるといつも言われていたことを思い出した。親戚のおじやおばたちはいまでも言う。「あんたは本当に日本語がじょうずだねえ」と。人類学や沖縄研究を単なる制度や領域としてではなく，「経験」としてこの身で捉え返す機会がこのような日常の懐に潜んでいたことに戸惑いつつも，こうして繰り返し日本語テキストの余白を通して，つまりこの場で読み手と「私」の「感情」の共有を試みることは，ひとつの民族誌的实践にほかならない。